都良香と天神説話

松本　健

比較文化

HIKAKU BUNKA
Comparative Cultural Studies
The Graduate School of Humanities,
Fukuoka Jo Gakuin University

「福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要」第二一号抜刷

2024（令和 6）年 3 月

ISSN 2759-1654

HIKAKU BUNKA, Comparative Cultural Studies,
the Graduate School of Humanities,
Fukuoka Jo Gakuin University
2024, Vol 21 PP.01-14

福岡女学院大学 大学院
人文科学研究科 紀要 比較文化

都良香と天神説話

松本 健*1

一、はじめに

菅原道真の生涯と没後の怨霊譚を通して北野神社建立の由来をあらわした鎌倉時代の『北野天神縁起絵巻』（承久本・国宝）には、都良香なる人物が登場する。第二巻第一段の弓場の場面で、詞書は次のように記される。

貞観十二年青陽のころ都良香が家にて門生等が弓あそびけるにゆきあひ給ひたりける人々思様、この君はとぼそをとぢ、とじきみをいでずして、机案にみちをくだしつつ、弓のもとすゑは、しらせ給はじとおもひて、心みに御弓いさせ給てんやと申給ければ、ゆばについたちて、弓にやをさしはげて、ひきまわし給けるすがた、養由がかいなつき、まのあたりみつるかなと、おのおのめもをどろくほどに、ふたたびはなち給へば、ふたたびあたり、ももたびはなち給へば、ももたびあたる。昔もきかず、今もみず。いきをい、たいはい、たとへんかたおはしまさず。都良香、人々をどろきあざみ申ける。やがてその年の三月二十三日に献策しましまし。みやこのうちの人々めでたきためしにぞ申あひはんべりける。[1]

貞観十二年（八七〇）、少内記の都良香邸で弓遊びが行われているところに文章得業生の菅原道真（二十六歳）が通りかかる。人々が思ったのは、この青年は部屋に閉じこもって机に向かってばかりいるので弓の基本を知ることもないのだろうということであった。試しに射させてみようということになると、道真が弓を扱う姿は、中国春秋時代の弓の名人の養由の腕さばきを見ているようで、皆が驚いていたところ、再び射れば再び命中し、百回射れば百回命中した。このようなことは前代未聞であり、勢いも礼法も例えられるものもなく、都良香も人々も驚いて呆然となった。やがてその年の三月二十三日に官吏登用試験に合格し、都の人々はおめでたいことと言い合ったという。

天神として崇められる菅原道真をいわゆる「学問の神様」としてだけでなく、全方位的な才能において称賛するために挿入され

*1 福岡女学院大学大学院人文科学研究科比較文化専攻

 ISSN 2759-1654

ているエピソードであるが、史伝として残っている話ではないので、そもそもその「場」を都良香邸とする必要はないものであった。

しかしその後、都良香の名は天神説話の中にさらに書き足される。天神信仰がいよいよ盛んとなった江戸時代、国学者の平田篤胤が文政三年（一八二〇）に記したという『天満宮御伝記』には、「〇天満宮御生立の事。並に都朝臣の許にて、御弓遊ばせし事。付たり御昇進の事」に右記のエピソードが載るほか、「〇渤海国の使に応接し給ふ事。付たり羅城門の鬼神良香朝臣の詩を継たる事並に菅公讃岐守に任て雨を祈給ふ事」に再び都良香の名が登場する。

……都良香朝臣参内せらるる時に、羅城門を過られけるに、春風あたたかに、糸を乱せる柳、家々の垣根ごとに見えければ

気霽風梳新柳髪
氷消浪洗旧苔鬚

といふ句を思ひ得て、次の句を案じ煩ひたりけるに、羅城門の上より、大きにしはがれたる声にて、

とぞ付たりける。良香朝臣身の毛も立ちて恐ろしかりけれども、然すがに嬉しくて奇なるかな。神助にこそあれと思ひて参内し、大内にて菅公に逢参らせ試に、良香こそ羅城門にて、佳対の句を作り得て侍れとて、二句を申しつづけたりければ、菅公うち笑はせ給ひて、上句はまことに御自作の詞とおぼえたり。下句におきては、鬼神のつぎたるにやと仰られければ、良香おどろきて、事の実をしかじかと述らる。此よりして、菅公は神に通じ給へりとぞ、人も申ける。(2)

都良香が宮中への道すがら羅城門を通った時に、「気はれて、風、新柳の髪をくしけずる」という詩句を思いついたのだが、そこに続けるべき句を思い悩んでいたところ、羅城門の上から大きなしわがれた声で、「氷消えて、浪、旧苔の鬚を洗ふ」と句を付けた。良香は身の毛もよだつ恐ろしさを感じたが、そうは言っても嬉しくて珍しいことである。神の助けに違いないと思ってそのまま宮中へ行き、菅原道真に会って「私は羅城門で見事な対句を作りました」と言って披露したところ、道真はお笑いになって、「一つ目の句は確かに御自作の言葉と思われました。二つ目の句は、鬼神が付けたのでは?」おっしゃられたので、良香は驚いて事実を詳しく述べられた。ここから菅原道真は「神に通じなさっている」と人も言うようになったというのである。

後に「天神」となる菅原道真の尋常ならざる「神性」が人々に認知されることになる重要な契機に都良香のエピソードが関わっているのである。

文武両道の才を知らしめることとともに、菅原道真の神格化に重要な役割を果たすことになる都良香のエピソードは、はたしてどのような理由でそこに収まることになったのか。平安期から江戸期までの資料をたどりながら考えていきたい。

二、都良香と菅原道真

都良香と菅原道真との接点において、まず史実といえる部分を整理しておきたい。

貞観十二年（八七〇）、文章得業生であった菅原道真は方略試を受験する。その時の問答博士（試験官）を務めたのが都良香であった。策問（出題）は二問。

一つ目の問題は「明氏族」（氏族を明らかにせよ）で、「問。錫姓分類、導俗之方著焉、命氏表功、軌物之迹至矣。是故、魯記繫月、天子動建徳之風……（問う。姓を錫ひ類に分かち、俗を導くの方著はれ、氏を命じ功を表し、物に軌ふの迹至る。是の故に、魯記は月を繫ぎ、天子は建徳の風を動かし……）」[3]と始まる美文で氏族・家系の何たるかを問いかける。

それに対して菅原道真は「竊以、天形地翮、人倫則三才之所克諧。翼子謀孫、姓氏則九族之攸周備。因其事、……（竊に以に、天形地翮は、人倫則ち三才の克く諧へる所。翼子孫に謀、姓氏則ち九族の周備はる攸。其の事に因りて……）」[4]と始まる美文で中国の歴史上の氏族の源流等を論じる。

二つ目の問題は「弁地震」（地震を弁へよ）で、「問。貞牝孕気、奉泰一以輸功、富嫗資生、……（問う。貞牝は気を孕み、泰一を奉じて以て功を輸し、富嫗は生を資け、……）」[5]と始まる躍動感のある文章をもって当時頻発していた地震について論じるよう問いかける。

それに対して菅原道真は「竊以、陰陽不測、上帝仮手於人君。性命難言、先王設機於号令。……（竊に以に、陰陽測らず、上帝手を人君に仮す。性命言ひ難し。先王機に号令を設く。……）」[6]と始まる文によって、儒教・道教・仏教での地震に纏わる言及を並べることによって答えていく。

さて、これら二つの答案に対して都良香が採点した記録も残っている。「評定文章得業生正六位下行下野権掾菅原対文事（文章得業生正六位下行下野権掾菅原の対文を評定する事）」[7]であり、次のように始まっている。「今按所対、初条云、余是荊安之族、源

出由余。余則穎川之人、説通応邵。案姓氏譜云、余氏者夏少康之苗裔、越王勾践子聚、為顧余侯、其後子孫相分、或為顧氏、或為余氏。余氏宗族多在汝南、歴代以来文字訛謬、在北正存余氏、向南誤為余氏。而対文偏尋泰卿由余々之一枝、誤為疎隔之二族。又云、……（今、対文を調べると、初条に、余氏は荊安の氏族であり、もとは由余から出たものである。余氏は穎川の人であり、応氏・邵氏の出自と通じるとある。姓氏譜をみると、余氏は夏の少康の血筋であり、越王句践の子の聚が顧余侯となって、その後、子孫がそれぞれ分かれ、顧氏となったり、余氏となったりしたのである。余氏の一族の多くは汝南にあって、代々時が経過するにつれて、文字が誤って、北にあるのは正しく余氏を保ち、南に向かったものは誤って余氏となったのだと。しかし、対文には、ひたすら泰卿の由余の源流だけを考察し、まだ夏の少康の子孫が余氏になったかどうかを明確にしておらず、到々同じ流の余氏を分類し、誤って離れた二族となしている。また、……）」。

まずは「明氏族」の答案に対して具体的に誤りが指摘され、厳しい言葉が並んでいるのである。そして続いて「弁地震」の答案についてもやはり欠点が挙げられていく。「理窟難究、空疲五大山之往還、思風妄吹、徒苦六万歳之交戴。又……（地震の起こる理由は押し極められておらず、空しく五大山が動いてしまうというふうなことに理は滞り、妄りに種々の考えを述べてはあるが、震動は大亀が六万年に一度交代することによって生じるのだというふうなことにこじつけられている。また……）」。

このように具体的な指摘を経て、最後に試験の合否が発表されることになる。「……況亦病累頻発、乖違格律。然而但織詞章、其体可観、准之令条文乎。理粗通、仍置之中上。（……また、文章中には多くの瑕瑾が有り、作文上守るべき規則にはずれている。しかし、文章は彩を成し、文体には観るべき点が有り、令の条文により評価出来なくはない。筋道はほぼ整っており、よってこの対文を中の上とする。）」。

なんと菅原道真の方略試は「中の上」としてほどほどの成績での及第だったのである。江戸時代以降は「学問の神様」として全方位的な才能と高貴な人格をもって語られる天神説話には登場しない、都合の悪い史実である。しかしこの史実はむしろ反動のように菅原道真の天才エピソード構築のエネルギーとなっていったようなのである。

まず、「はじめに」の冒頭で引用した『北野天神縁起絵巻』であるが、「弓場」の描写に続いて「やがてその年の三月二十三日に献策しましましき」と書かれていた。付け足しのようなこの部分こそ史実であり、都良香の名は試験官として本来ならこの「献策」の方で出るべきものであった。しかし不都合な試験結果に触れないためにそこには名は出されずに、史実かどうかは定かではない

「弓場」の方に名を出される。都良香邸という具体的な場所の明記によって、こちらのエピソードがさも史実であるかのように補強されるわけである。

そしてこのエピソードにはさらに尾ひれが付いていく。室町時代の軍記物語『太平記』巻第十二「大内造営并びに聖廟の御事」では次のように記される。

その年の春、都良香の家に人々集まりて、弓を射けるところへ、菅丞相おはしたりけるに、都良香、この菅丞相はいつとなく蛍雪の窓にのぞんで、文学の稽古に隙なき人なれば、いまだ弓の本末をば知り玉はじ。的を射させ奉りて、咲はばやとおぼして、弓に的矢を取りそへて、菅丞相の御前に指し置き、「上陽の始めの遊会にて候ふに、一こぶし遊ばされ候へ」と申されたりければ、菅丞相少しも辞退の気色なく、弓場につい立ちて、雪の如くなる膚を推し肩ぬぎて、矢をはげて打ち上げ、引きおろすより、しばししぼりて堅めたる体、切つて放せる矢放ち、矢色、絃音、弓倒し、五善何れもたくましく、勢ひあつて、五度の十をぞし玉ひける。都良香、感に堪へかねて、自ら席を起つて御手を引き、酒宴数尅に及んで、様々の引物をぞ進らせられける。[8]

『北野天神縁起絵巻』にはなかった「的を射させ奉りて、咲はばやとおぼして、」という表現が追加されている。都良香が菅原道真のことを「笑ってやろう」という意図で弓に誘ったということになっており、結果的に都良香にこそ恥をかかせる構図にしようとする悪意がある。そして最後には道真の弓の見事さに感服させて、「感に堪へかねて、自ら席を起つて御手を引き、酒宴数尅に及んで、様々の引物をぞ進らせける」と最大限の評価をさせるのである。これはまるで道真に対して「中の上」の評価を下した都良香の史実に対する反発のように作られたエピソードと見えるものである。

この「弓場」のエピソードについて、前節で「そもそも史伝として残っている話ではないので、そもそもその「場」を都良香邸とする必要はないものであった」と述べたが、ある意味で都良香の名は、出されるべくして出されたともいえそうなのである。

平安時代の歴史書『扶桑略記』第二十「元慶三年二月二十五日」の条に、都良香のことが書かれている。

二十五日乙酉。文章博士従五位下兼行大内記越前権介都朝臣良香卒。左京人。従五位下主計頭貞継之小子也。良香本名言道。後改名也。姿体軽揚。甚有膂力。博通史伝。才藻艶発。声動京師。居貧无財。常不学霎。駅思空門。雅信仏理。于時僧正真然住東寺。良香就受真言密教。一遍而記於心。雖勤学業。不廃念仏。年四十六卒。[9]

元慶三年二月二十五日、文章博士で大内記であった都良香が四十六歳で没した。主計頭だった都継之の子で、本名は言道であったが改名した。史実を伝える以上の情報以外に「人となり」をあらわしているのが、「姿体軽揚。甚有膂力。博通史伝。才藻艶発。声動京師。居貧无財。常不学爨。駅思空門。雅信仏理。于時僧正真然住東寺。良香就受真言密教。一遍而記於心。雖勤学業。不廃念仏。」の部分である。これを現代語訳すると、「体力に恵まれ、史伝に詳しく、優れた文章を書き、人々を感動させ、また貧しさを厭わないものであった。さらに仏教への傾倒がみられ、真言密教を僧正真然から受け、学業に励みつつも、常に念仏を称えていた」[10]となる。

これはまるで、菅原道真を全方位的な才能と人格において崇めるために用意された言葉であるかのようである。中心人物たる菅原道真のお株を奪ってしまうようなこれらの称賛が向けられる人物は、「周辺」としてはあまり望ましい存在ではない。後にいわゆる「学問の神様」として崇められるようになる根拠の一つとして文章博士という役職も重要であったであろうが、この都良香もやはり文章博士であった。そして菅原道真に試験官として「中の上」を付けた人物である。都良香の名はもはや「狙い撃ち」として出されたと考えられそうなのである。

三、都良香の作詩

それでは次に、「はじめに」で引用したもう一つのエピソードに注目してみたい。平田篤胤が文政三年（一八二〇）に記したという『天満宮御伝記』「〇渤海国の使に応接し給ふ事。付たり羅城門の鬼神良香朝臣の詩を継たる事並に菅公讃岐守に任て雨を祈給ふ事」である。

都良香が宮中への道すがら羅城門を通った時に、「気はれて、風、新柳の髪をくしけずる」という詩句を思いついたのだが、そこに続けるべき句を思い悩んでいたところ、羅城門の上から大きなしわがれた声で、「氷消えて浪旧苔の鬚を洗ふ」と句を付けた。良香は身の毛もよだつ恐ろしさを感じたが、そうは言っても嬉しくて珍しいことである。神の助けに違いないと思ってそのまま宮中へ行き、菅原道真に会って「私は羅城門で見事な対句を作りました」と言って披露したところ、道真はお笑いになって、「一つ目の句は確かに御自作の言葉と思われました。二つ目の句は、鬼神が付けたのでは?」と言い当てたというのである。

「此よりして、菅公は神に通じ給へりとぞ、人も申ける。」と締めくくられ、菅原道真の神性をアピールするエピソードとなっている。

実は先ほどは引かなかったのだが、この引用箇所の直前にはもう一つのエピソードが書かれていた。

元慶七年に、渤海国の使、裴頲といふ人来朝せり。菅公を権に、治部大輔といふ官になして、応接せしめ給ふ。贈答の御詩あまた御集に見えたり。使者菅公の文筆を白楽天に似て、なほ勝給へりと感歎し奉りける。[11]

元慶七年（八八三）に渤海国の使者の裴頲らが来日した。菅原道真が鴻臚館で応接し、贈答を行ったという十首の詩が『菅家文草』にも残っており、[12]このような行事があったこと自体は史実である。しかしここで重要なのは「白楽天よりも優れている」と渤海国の使者に称賛されたとしてアピールしたかった菅原道真の作詩の才能の方であろう。

つまり都良香の作詩のエピソードがここに続いて書かれたのは、菅原道真の作詩の才能をアピールするための比較材料として出されただけであって、やはり都良香は「利用された」ということなのである。鬼神が作った詩を自らのものとして披露するという不正を行ったとして都良香を落としめ、それとの対比によって菅原道真の詩の才能を称賛しようとするのは、やはり方略試において厳しく採点された史実を覆い隠すような反動として書かれたものと考えられる。

この詩はそもそも都良香自身の作として由緒のあるものであった。平安後期の説話集『江談抄』の第四の二〇に次のように記されている。

内宴。春暖　都良香

故老伝へて云はく、「かれこれ騎馬の人、月夜に羅城門を過ぎつてこの句を誦す。楼上に声有りて曰はく、「あはれ」と云々。文の神妙、自ら鬼神を感ぜしむるなり」と。[13]

引用した新日本古典文学大系『江談抄 中外抄 富家語』の脚注においては、この「内宴。春暖」が『菅家文草』第二における「早春、侍宴仁寿殿、同賦春暖、応製」（元慶二年）として菅原道真が詩文を遺している時と同じ機会のものと判断している。それは『三代実録』に記される元慶二年（八七八）正月二十日の内宴であり、そこでの作となるという。『三代実録』を見てみると巻二十三の元慶二

年正月二十日の項に「〇二十日丙辰。内宴。近臣賦詩及奏女楽。群臣歓洽。畢景而罷。賜禄各有差。」[14]と書かれている。詩を賦い、女楽を奏で、群臣は喜び打ち解け、めでたい宴席が終了すると帰って行った。禄を賜ったことにはそれぞれ差があったということである。優れた詩が披露された可能性、称賛の言葉が寄せられた可能性、または軽口が寄せられた可能性等、どのような事態も想像できる「場」であったといえよう。

面白く思われるのは、「気霽風梳新柳髪　氷消浪洗旧苔鬚」の披露の場に菅原道真が確かに同席していたということである。しかし、それを「自作ではない」と指摘したわけではなかった。この『江談抄』詞書では羅城門を通り過ぎながら「騎馬の人」がこの詩句を誦した時に、楼上から「あはれ」と称賛の声がかけられたと伝える。つまり都良香の作としてこの詩は既に完成されたものであった。その上で、優れた詩文がもつ神性によって鬼神を感動させたという解釈である。同右の脚注では、『古今和歌集』の紀淑望による「真名序」に和歌の働きが「動天地、感鬼神」とまで書かれていることも指摘している。

「神に通じ」ていたのは、都良香の方だったのである。この句がどれほど優れたものであったのかを記した説話もある。鎌倉時代の仏教説話集『撰集抄』第七の八「都良香竹生嶋并朱雀門ニテ詩作事」で、ここには菅原道真は関与していない。

延喜ノハジメツカタ、都良香二月ノ十日比、内ヘマイリケルニ、朱雀門朱雀門ノ辺ニテ、春風ニ青柳ノナビキケルヲ見テ、気霽風梳新柳髪ト詠ジテ、下句ヲイハントテウチアンゼルニ、朱雀門ノ上ヨリ、アカキ鬼ノ、白キタウサキシテ、物オソロシゲナルガ大ナル声シテ、氷消浪洗旧苔鬚ト付テ、カキケスゴトクニ失ニケリトナン。此詩ノココロコトバタグヒナクゾ侍ケル。実モ風大虚ニ吹バ、気ハ四方ニハレテ、青柳髪ト見エテ、カゼニケヅレリ。初メ気ハルル春ニシアレバ、新柳ト云モ、ココロヨロシキナルベシ。鬼ノツクル下句、又有ガタクゾ侍ルベキ。水ハ氷ニトヂラレテ、汀ノ旧苔ススガルルヨモナキヲ、気ハレテ新柳風ニケヅラル。春ハ氷ヒラケテ、苔ノ鬚ヤヤ水ニアラハレテ、柳ヲカミトスレバ、苔ヒゲトスル。木草ノモトスエナル心マデモメタリ。返返面白ウ侍リ。[15]

延喜年間（九〇一～九二三）のはじめの頃という。ちなみに都良香は承和四年（八三四）に生まれて元慶三年（八七九）に没しているので、エピソードとして冒頭から史実ではないことがわかるのだが、朱雀門の辺りで「気はれて、風、新柳の髪をくしけずる」という詩句を思いつき、続く句を考えていたところ、朱雀門の上から、赤い鬼が白いふんどしをして恐ろしい大きな声で「氷消えて、浪、旧苔の鬚を洗ふ」と付けて消えていったというのである。

場所が羅城門ではなく朱雀門であるという違いも目につくが、何よりもこの句を解説し、どこが優れているのかを「この詩の心・言葉、類なくぞ侍りける」という言葉に続けて述べていることに注目したい。自然と人体をダイナミックかつ繊細な比喩表現で結び付けながら春の風景を美しい対句で描いていたということである。

『天満宮御伝記』「〇渤海国の使に応接し給ふ事。付たり羅城門の鬼神良香朝臣の詩を継たる事並に菅公讃岐守に任て雨を祈給ふ事」では、菅原道真が二つ目の句は自身の作ではなく「鬼神が付けたのでは？」と即座に見抜いたとされていたが、実は、自然と人体をダイナミックかつ繊細な比喩表現で結び付けながら美しい対句を作るのは、都良香の得意とするところだったのである。

例えば、平安中期の『和漢朗詠集』に採録された都良香の次のような詩句がある。

凝如鳳女顔施粉　滴似鮫人眼泣珠（巻上 秋 萩）

（凝っては鳳女の顔に粉を施せるがごとし　滴っては鮫人の眼の珠に泣くに似たり）

新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』の脚注に付けられた訳では、「紅蘭に露がたくさん降りているが、それはあたかも簫史の妻の鳳女が白粉をつけて化粧をしたようである。また、その露がしたたり落ちるさまは、ちょうど南海の人魚姫が真珠の涙を流すかのようである。」となる。[16]

他に次のような詩句もある。

雲消碧落天膚解　風動清漪水面皺（巻下 雑 晴）

（雲碧落に消えて天の膚解く　風清漪を動かして水の面皺めり）

同じく脚注の訳では、「雨が晴れ上がって、雲は天空から消え去り、天の地肌が雲から解き放たれてすっきりと見える。風は美しいさざ波を吹き動かして、水面に細かなしわができたようだ。」となり、「雨後のさわやかさを天空と地上との対比において詠じたもの。その両者に人の地肌を連想した文字遣いをしている技巧が新鮮である。」と評されている。[17]

まさしく自然と人体をダイナミックかつ繊細な比喩表現で結び付けながら風景を美しい対句として描いていたものであり、「気霽風梳新柳髪　氷消浪洗旧苔鬚」の対句が都良香の作として納得される要素となる。

それではなぜ「鬼神が付けたのでは？」という展開となったのか。これについて一つの解釈を提示してみせたのが、江戸時代の儒学者貝原益軒であった。『太宰府天満宮故実』において例のエピソードを紹介した後、次のような説を載せている。

或人のいはく、羅生門にて、空中より、鬼神の対句を唱へし事、甚あやし。おそらくは、良香の佳対を、菅公感賞し給ひて、下の句は、人の作れる語にあらじ。鬼神の句ならんと誉させ給ひけるを、世の人聞て、かく云なしけるにや。いぶかし。[18]

誉め言葉としての「人の技を超えた鬼神のなせる技」といったような意味の表現が、やがて「鬼神の作」として受け取られていったということである。この詩が披露された「内宴」が先ほど述べたように、優れた詩が披露された可能性、称賛の言葉が寄せられた可能性、または軽口が寄せられた可能性なども想像できる「群臣歓洽」（群臣が喜び打ち解けた）という場であったのなら、「不正の指摘」などよりもこちらの方が納得できる。

四、都良香と神

ところで、実は都良香と「鬼神」とは思いのほか深い繋がりがある。まず、都良香自身が貞観十一年（八六九）に受けた方略試の策問が「神仙」と「漏刻」であった。春澄善縄を試験官として及第し、翌年に少内記に任ぜられている。この策問のうち特に「神仙」の対策文は、「対。竊以、三壺雲浮、七万里之程分浪、五城霞峙、十二楼之構挿天。（対す。竊に以みれば、三壺は雲のごとく浮かび、七万里の程は浪を分かち、五城は霞のごとく峙ち、十二楼の構は天を挿む。）」[19]と始まるもので、名文として後にしばしば引かれるようになるものであった。

蓬莱・方丈・瀛州の三仙山は雲中に浮かび、それぞれを遥かな七万里の波が隔てている。崑崙山にあるという五城には霞がそばだち、十二楼の高殿は天に突き抜けるようにそびえ立つと表現する。神仙世界を壮大に描いているのである。都良香はここから既に「神に通じ」ていたのである。

あまりに名文であるために都良香が不正を働いてこの文を準備したという逸話も付随してくる。鎌倉時代の教訓説話集『十訓抄』の第七「思慮を専らにすべき事」には「都良香の神仙策」の項がある。

都良香、策対の時、問頭博士は春澄善縄なり。良香、ひそかにかの家の侍女にかたらひて、善縄が草案の、焼き捨てたりけるを乞ひ取りて、開きて見、試みてのち、

三壺に雲浮ぶ、七万里のほど浪を分つ

といふ「神仙策」の秀句を作りまうけたりけり。[20]

あらかじめ試験官春澄善綱（善縄の誤り）の家の侍女に通じておいて「神仙」の出題を知り、秀句の準備をしたというのである。その経緯の真偽はともかくとしても「秀句」であることは認めざるを得ないということが伺われる。

都良香が「神に通じ」ていたという話は他にもある。既に言及した鎌倉時代の仏教説話集『撰集抄』第七の八「都良香竹生嶋并朱雀門ニテ詩作事」には、引用した「朱雀門」のエピソードの前に、「竹生嶋」のエピソードが書かれていた。

ムカシ宇多ノ帝ノ御コロ、都良香トイフイミジキ博士侍リケリ。卯月ノ比、江州竹生嶋ヘ人々トモナヒツレテ参リケル。ハルカニ山ノイタダキニ上リテ、御社ヘイタリヌ。四方見エワタリテ、実面白キ所ナリ。カカレバ都良香、三千世界眼前尽トツクッテ詠セリケルニ、神殿オビタダシクユルギテ、殊更ニケダカキ御声ニテ、十二因縁心裏空トイフ御句ノ、人ノ耳ニアザヤカニ聞エ侍リケル。忝ゾ侍ル。実高キ御山ノ、ハレタル所ナレバ、三千世界ハ眼ノ前ニ尽ヌトイフモ理リニ侍ル。ソレニ十二因縁ハ心ノウチニムナシク侍ラン。返ス返スイミジク侍ル。実モ神ナラズハ誰バカリカ。カカル句ヲバツケ給ハントゾ覚侍ルニ、小野篁ハ、人皇ノ意ヲ悦バシメテ、相公ニイタリ、都良香ハ明神ノ感歎ニアヅカル。能芸ハ実カタジケナクゾ侍ル。扨モ都良香ハ、十二因縁ハ心ノウチニムナシト云御詩ヲ、日ニ三度トナヘテ、後世ノツトニ向ヒケルニ、ハタシテ此心ヲサトリテ、終リヲトリニケルモ、有ガタクタットクゾル。[21]

宇多天皇の時代（八八七～八九七）と始まっているが、都良香は元慶三年（八七九）に没しているので史実ではなくやはり「説話」として読むべきものである。四月に琵琶湖の竹生嶋を人々とともに訪れ、高い山の上にある社まで上った。四方がよく見えてとても面白い所だったので「三千世界は眼の前に尽きぬ」と詠じると、神殿がおびただしく揺れて特別に気高い声で「十二因縁は心の裏に空し」という句が付けられたのが鮮やかに聞こえた。ありがたいことである。高い山で晴れている所であれば「仏教でいう広大無辺な全ての世が見渡せる」というのもわかる。そこで「十二あるという全ての煩悩の因果も心から消えていく」となる。返す返すも素晴らしいと称賛する。神でなければ誰がこのような句を付けるのだろうと小野篁は天皇に報告して喜ばせ、相公にまでなった。ちなみに小野篁は仁寿二年（八五三）に没しているのだが、特に漢詩に優れた公卿・文人として知られているのでその名を出す意味があったのだろう。ともかく都良香は明神の感歎を受けたのである。才能は実にありがたいものである。都良香は「十二因縁は心の

裏に空し」という詩句を日に二三度唱えて後世の日々を過ごし、遂にはこの心を悟って往生したというのも本当に尊いことであると結ばれている。いかにも仏教説話としての意味付けであるが、神仙の声が句を付けるというエピソードは羅城門だけではなかったのである。

既に紹介した『扶桑略記』での都良香の説明において、「仏教への傾倒がみられ、真言密教を僧正真然から受け、学業に励みつつも、常に念仏を称えていた」という仏教に関する記述があったことも思い起こされる。特に真言密教であったことが都良香と神仏との交感を想像させる。

平安後期の説話集『江談抄』でもこの竹生嶋のエピソードは伝えられている。

三千世界は眼の前に尽き　十二因縁は心の裏に空し

晩夏、竹生嶋に参りて懐ひを述ぶ　都良香

故老伝へて云はく、「下七字、作者思ひ得難し。嶋主の告げ教へたまふ」と。[22]

平安後期の歌論書『袋草子』では少し異なっている。

弁才天の詩、

三千世界眼前に尽き　十二因縁心裏に空し

上の句は竹生島において都良香案ずるなり。下の句は思ひ得ること能はず。而して、その後の夢に弁才天これを示さるる所なり。[23]

竹生島では一句目を詠んだのみで二句目は声を聞いたわけでもない。後の夢に弁才天が出てきてこれを告げたことになっている。

鎌倉時代の説話集『古今著聞集』（第四「文学 第五」一一三「都良香、竹生島に参りて作詩し、弁財天の夢の告を蒙りて下句を得る事（抄入）」）でもこの「夢」の形が取られていた。

都良香、竹生島に参りて、

三千世界眼前尽　三千世界は眼の前に尽きぬ

と案じ侍りて下の句を思ひ煩ひ侍りけるに、その夜の夢に弁才天、

十二因縁心中空　十二因縁は中に空し

と付けさせ給ひける、やむごとなく事なり。[24]

やはり都良香こそ、「神に通じ」ていたというに相応しい詩人だったのである。

五、おわりに

都良香と天神説話との関係については先行研究がある。

黒田佳世「都良香をめぐる説話の変容について――「気霽風梳新柳髪」の説話を中心にして――」[25]では、「気霽風梳新柳髪」の対句にまつわる説話を、都良香自身が対句を付けたとする第一タイプから、鬼が付けたとする第二タイプ、それを菅原道真が見破ったとする第三タイプへと変容していったとし、「良香の説話が道真讃美の目的のために利用された」と見ていた。

また、黒木香「都良香の変質と「天神縁起」――鬼の付句をめぐって――」[26]では、都良香の説話が「天神縁起」内部に吸収されることで「良香の位置の低下だけに留まらず、彼の人物像が矮小化されている」と指摘していた。

本稿ではこれらの先行研究では扱われてこなかった弓場でのエピソードや江戸期の資料を含めて俯瞰してみたことで、それらの傾向をより顕著に見出すことができた。また、説話や縁起だけでなく、都良香自作の他の詩や方略試の際の文章といった一次資料も参照することによって、その役回りに宛てられたのが「なぜ都良香だったのか」という疑問に踏み込むこともできた。

菅原道真の「学問の神様」としての威厳、「詩の名人」としての名誉、「神に通じていた」という神秘性、都良香の事績と逸話はまさしくそれらをおびやかすような存在であったといえる。それゆえに、敢えて矮小化して道真の事績と逸話の「周辺」として並べ、道真の名誉を称えるために利用するという方法が取られたと考えられるのである。

【註】

(1) 角川書店編集部編『日本絵巻物全集 第八巻 北野天神縁起』(昭和三十四年、角川書店) 五九頁。引用に際して濁点と句読点を補い、踊り字の一部は文字に改めた。
(2) 平田篤胤編述、風月庄左衛門発行『天満宮御伝記』(明治三十五年、風月堂) 八～九頁。引用に際して濁点と句読点を補い、踊り字の一部は文字に改めた。
(3) 中村璋八・大塚雅司『都氏文集全釈』(昭和六十三年、汲古書院) 一六八頁。
(4) 川口久雄校注『菅家文草 菅家後集』(昭和四十一年、岩波書店) 五四九頁。
(5) 注 (3) に同じ。一七一頁。
(6) 注 (4) に同じ。五五一頁。
(7) 注 (3) に同じ。一九六～二〇〇頁。
(8) 長谷川端校注・訳『太平記②』(平成八年、小学館) 三四頁。
(9) 望月二郎編『国史大系 第六巻』(明治三十年、経済雑誌社) 六〇四頁。
(10) 注 (3) に同じ。二一八頁。
(11) 注 (2) に同じ。八頁。
(12) 注 (4) に同じ。一九〇～一九七頁。
(13) 後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『江談抄 中外抄 富家語』(平成九年、岩波書店) 一一四～一一五頁。
(14) 黒板勝美編『新訂増補 国史大系 第四巻 日本三大実録』(平成十二年、吉川弘文館) 四二二頁。
(15) 高楠順次郎・望月信亨編『大日本仏教全書 第一四七冊 撰集抄・発心集・宝物集』(昭和七年、有精堂書店) 一一九頁。
(16) 菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』(平成十一年、小学館) 一五八頁。
(17) 注 (16) に同じ。二二二頁。
(18) 貝原益軒『益軒全集 巻之五』(明治四十四年、益軒全集刊行部) 八三二頁。
(19) 注 (3) に同じ。一四九頁。
(20) 浅見和彦校注・訳『十訓抄』(平成九年、小学館) 三一〇頁。
(21) 注 (15) に同じ。一一八～一一九頁。
(22) 注 (13) に同じ。一二二頁。
(23) 藤岡忠美校注『袋草子』(平成七年、岩波書店) 一五〇～一五一頁。
(24) 西尾光一・小林保治校注『古今著聞集 上』(昭和五十八年、新潮社) 一六四～一六五頁。
(25) 黒田佳世「都良香をめぐる説話の変容について―「気霽風梳新柳髪」の説話を中心にして―」『芸文東海』第四号 (昭和五十九年、研究者集団芸文東海) 四～七頁。
(26) 黒木香「都良香の変質と「天神縁起」―鬼の付句をめぐって―」『国文学攷』百四号 (昭和五十九年、広島大学国語国文学会) 一〇～一九頁。